

## 失語症者の漢字1文字の読みについて

新貝尚子<sup>1</sup>(しんかい たかこ) 金子真人<sup>2</sup>、前川真紀<sup>3</sup>

日本医科大学付属第二病院 リハ科言語室<sup>1</sup>

都立松沢病院 リハ科言語室<sup>2</sup>

横浜総合病院 リハ科言語室<sup>3</sup>

(要旨) 単語の音読の可能な中等度以上の失語症例に漢字1文字の音読みと訓読みの表出課題を行い、音訓差と音訓平均正答率から良好群、準良好群、訓障害群、音障害群および混合群の5群に分類された。訓障害群と音障害群では、錯読数には差はないものの無反応や誤反応に質的な違いが認められた。両者は失語症のタイプや重症度、随伴症状の上でも質的に異なっており、漢字1文字の音・訓読みの処理に失語症状を反映した障害パターンがあることが示唆された。

Key words: 漢字1文字 音読み 訓読み 失語症者

漢字には音読みと訓読みがあり、多くの漢字が複数の読み方を持つ。しかし、音読みか訓読みかどちらかしか持たないものもあり、漢字熟語の音読において、読み方が単一か複数かという一貫性がどのように反応潜時や正答率に影響を及ぼすかが報告されている(Wydellら,1995;Pattersonら,1995;Wydellら,1997)。これに先立って、英単語の音読において形態から音韻に至る過程に単語単位と文字単位の両方の処理が関与することが、一貫性、規則性、頻度、熟知度、心像性などの操作的指標により確認されている。この過程が言語や文字体系によって相違するのか、普遍的なものであるのかに興味の対象となっている。日本には漢字単語の音読や漢字と仮名を対比させた研究は多いが、漢字1文字の音・訓読みに関する研究は殆どみられない。今回高頻度の漢字・仮名单語の読みが可能な失語症例を対象に漢字1文字の音読み・訓読み表出能力について検討したので報告する。

**対象** 高頻度の漢字・仮名单語の音読が可能な中等度以上の失語症例 42例、平均年齢:58.5歳(21~84歳)、失語症のタイプ:健忘失語 14例、運動失語 14例、感覚失語 9例、伝導失語 1例、混合型失語 3例、超皮質性感覚失語 1例、重症度:軽度 19例、中軽度 13例、中等度 10例、原因疾患:脳梗塞 26例、脳出血 10例、くも膜下出血 3例、頭部外傷 2例、脳腫瘍 1例。

**方法** 小学校1年から6年の教育漢字1文字 100語(具体名詞 50語、動詞・形容詞 50語)を提示し、音読み・訓読みの2通りの読み方を答えさせた。制

限時間は30秒とした。

**結果** 訓読みの出現率は100~57%、音読みの出現率は100~16%まで分布し、音読みと訓読みの平均正答率は100~47%であった。

音訓差のパターンと音訓平均正答率とで42例を群別した。訓出現率が音出現率を20%以上上回る訓読み優位の音障害群(11例)と、それ以外の音訓差の少ない群とに分けられた。音訓差の少ない群はさらに平均正答率により、A90%以上の良好群(8例)、B80%以上90%未満の準良好群(12例)および80%未満の群に分けられ、そのうち音出現率が訓出現率を上回る音読み優位の訓障害群(5例)をD群として抽出し、それ以外をC群(6例)とした。音障害群はE群とし、E群の平均正答率は81~47%であった。

以下5群間で比較を行った。

1)群別の音訓出現率:それぞれ、訓出現率・音出現率 音訓差 の順に、A96.5%・93.9% 2.6%、B89.1%・81% 8.1%、C81%・68.5% 12.5%、D63.8%・77.4% -13.6%、E85.3%・50.6% 34.7%であった。D訓障害群のみ音の出現率が高く、他は訓の出現率の方が高かった。

2)群別の平均錯読数:A13語、B31語、C38.5語、D46.6語、E57.5語であった。A<B<C<D<Eの順に多くなるが、D訓障害群とE音障害群との間に差はみられなかった。

3)群別の平均無反応数:それぞれ、平均無反応数 訓の無反応・音の無反応 の順に、A1.2語 0.6語・0.6語、B17.5語 7.4語・10.1語、C29語 11.8語・

11.8 語・17.2 語、D29 語 23 語・6 語、E36.6 語 85 語・28.1 語 であつた。A<B<C・D<Eの順に多くなるが、D訓障害群では訓の無反応が多いのに対し、E音障害群では音の無反応が多かつた。

4)誤反応分析: 反応は大きく2タイプに分けられた。漢字1文字の読みを想起するのに、それを含む熟語を想起したあとに目標漢字1文字分の読みを抽出するもの(泳 スイエイのエイ)と、漢字1文字分の読みだけを熟語を想起せずに表出するもの(泳 エイ、オヨグ)である。各群別の平均熟語想起数はA 2.5 語 B15.5 語 C13.7 語 D3 語 E29.4 語であり、前者のタイプの反応はD訓障害群で少なくE音障害群で多かつた。一方、後者の1文字レベルの反応は、各群別の平均がA10.5 語 B15 語 C24.3 語 D43.6 語 E23.3 語であり、D訓障害群で多くみられた。

また、誤反応のうち、熟語を想起したあとに目標漢字でない方の読みを表出してしまう抽出の誤り(泳 スイエイのスイ)は、各群別の平均がA0.8 語 B 3.3 語 C3 語 D0.2 語 E5.9 語であり、E音障害群で最も多くみられ、D訓障害群には殆どみられなかつた。

以上のように、漢字1文字の読みにおいて、音読みが表出されやすく訓読みが表出されにくい訓障害群(D群)と、訓読みが表出されやすく音読みが表出されにくい音障害群(E群)とでは、錯読数に差はみられないが、無反応や誤反応のパターンに質的な差異が顕著に認められた。

次に、各群と失語症との関連を検討した。

1)失語症重症度との関連: A全例軽度 B軽度 8 例、中軽度 4 例 C中軽度 4 例、中等度 2 例 D全例中等度 E軽度 3 例、中軽度 5 例、中等度 3 例であつた。音訓の平均正答率は全般的な失語症の重症度を反映していた。

2)失語症タイプとの関連: A健忘 4、運動 3、伝導 1 でいずれも軽度だつた。B,Cには様々なタイプが混ざつたが、Dは感覚 4、混合型 1 でいずれも中等度だつた。Eは運動 5、健忘 4 で感覚、混合型は1例ずつと少なかつた。

3)失語症状との関連: 各症例ごとに、語音認知障害、意味理解障害、語性錯語、字性錯語、仮名書字障害、モーラ分解・抽出の障害など他の失語症状との関連を検討した。A良好群には明らかな障害のない症例が多く、B準良好群には短文書取が何とか可能な程度の軽度の仮名書字障害がみられたが、モーラ分解・抽出には著明な低下は見られなかつた。E音障害群にはモーラ分解や抽出能力を含む仮名操作障害が明らかで、意味理解障害はないか、あつて

も軽度であつた。これに対し、D訓障害群には語音認知障害、意味理解障害、語性・字性錯語が明らかで、仮名書字障害はあるもののモーラ分解・抽出能力は保たれている症例がほとんどだつた。C群には一貫した傾向がなく、D訓障害群、E音障害群の亜型もしくは回復型が含まれた混合群といえた。

**考察** 高頻度の漢字・仮名音読が可能な失語症例は漢字1文字の音読みと訓読みの表出成績より、良好群、準良好群、混合群、訓障害群、音障害群の5群に分類された。特に訓障害群と音障害群は、誤反応のパターンや、失語症のタイプや重症度、随伴する失語症状において質的な差異が認められた。

訓障害群は意味理解障害が認められる中等度の感覚・混合型失語であり、仮名書字においてモーラ分解・抽出の障害はみられなかつた。漢字1文字の音訓の表出においても、熟語を想起することなく、1文字分の音を想起する方法をとつていた。

これに対し、音障害群は意味理解障害は顕著ではないが、モーラ分解・抽出能力を含む仮名操作障害を伴つていた。漢字1文字の音訓表出においても、1文字分の音の想起ができずに、その漢字を含む熟語の形で音を想起し、それから抽出するといふ方法をとつ、さらに目標文字ではない方の音を抽出するといふ誤りが多くみられた。

Wydellら(1997)の健常者を対象とした研究において、漢字の熟語の読みは音読みが典型的であり、規則的であるのに対し、1文字においては訓読みが典型的であることが示されている。本研究における1文字から音読みと訓読みの両方を表出するといふ課題は、その機能がスムーズに働かない失語症者において、その障害メカニズムを反映した障害パターンを示した。すなわち、訓読み表出の低下は意味処理障害と関連が深かつたが、漢字の音韻的側面は保たれ、文字単位の処理が機能的であつた。一方、音読み表出の低下はモーラ分解・抽出といった仮名操作障害との関連が深かつたが、漢字の文字単位の処理が機能しない分、意味処理が優勢となり熟語や意味性錯読の表出につながつたと思われた。漢字1文字と熟語の対比をとつて、漢字音読の処理についてさらに考察する。